

金城台の地学的・地理学的・生態学的歴史を探る

— 江戸期から現在に至る経緯 —

Geological, geographical, and ecological approach to the “Kinjo-hill”

— Changes of landscape since the Edo period —

小野 知 洋

Tomohiro ONO

緒言

金城学院大学は、1949年に名古屋市守山区に新制大学として設置された。前身の「私立金城女学校」（後に、「金城女子専門学校付属高等女学部」）のあった名古屋市東区白壁から移転し、守山区（当時は東春日井郡守山町）大森の丘陵地が校地として最終的に選ばれた。その経緯については「金城学院百年史」（学校法人金城学院1996）に詳しい。金城学院大学ではこの丘陵地を「金城台」と呼んでいるが、筆者はこの地が過去にどのような地学的な位置づけにあり、地理学的な背景をもち、その中でどのような生態学的特性を持つに至ったのかという点に着目した。

小野（2011）が示したように、現在、本学キャンパスは緑あふれる自然環境を持つに至っているが、それを今後とも適切に保全していくためには、大学キャンパス設置以降の植生変化のような数十年という短いスパンの分析はもとより、この地が過去にどのような特性をもっていたのか、それが地域の中でどう利用されてきたのかといった、より長いスパンでの歴史を知る必要がある。都市周辺地域の自然環境はそれぞれの場所で受け継がれてき

た文化とともに存在したはずである。逆に、農耕を営むにしろ、森林の管理を行うにしろ、その場所の自然科学的特性を無視した行為であれば、必ずそこには破綻が生じ、継続的な土地利用や環境の維持ができないのである。したがって、我々が目にする今の姿の背景にある歴史を知ることが、今後の保全を考える大きなヒントともなる。

このような考えにもとづいて、本学およびその周辺地域の自然環境を保全するという目的のために、過去にこの地がどのような姿であったのか、とりわけ本学キャンパスを特徴づける湿地はどのような周辺環境の中で生まれ、どのように維持されてきたのかという視点で検討を試みた。その中で、この地域の原風景ともいえる姿を浮き彫りにし、先人の努力をよりよく踏襲することから、今後の保全計画を考えていきたいと考えている。本論では、特に近世以降の森林の構成と湿地の成立という視点を中心に、大森地区周辺の過去の姿を探っていく。

大森地区の地学的位置づけ

近世以降の状況を理解するにあたって、その基盤となるこの地の地学的な位置づけをまずは把握しなければならない。そこで、ここでごく簡単にこの地域の特徴を述べる（こ

れに関しては多数の紹介文献があるが、例えば、松沢1990)。

大森地区が含まれる現在の名古屋市守山区東部から尾張旭市、瀬戸市にかけての丘陵地域は、猿投山に源流をもつ矢田川の北側に位置する。そのさらに北側には庄内川が流れ、この2つの川はやがて名古屋市内で合流する。したがって、現在の瀬戸市西部、森林公園、東谷山、守山区小幡にかけての地帯は南北両側を2つの河川によって削られて残っている丘陵地といえる。その丘陵地の西側（名古屋市中心部側）のほぼ先端に位置するのが金城台であり、この先は広大な濃尾平野となる。

名古屋市北部を流れている矢田川は、江戸時代にはかなりの暴れ川であったようで、たびたび氾濫をおこしながら、名古屋市中心部を構成する5万～15万年前に形成された熱田台地の北端を削っていた。そのため、名古屋市の中心部から北に向かって走る道路は千種区、東区、北区などのどこかで、この東西に長く連なる段差に出会うこととなる。大津通が市役所交差点を過ぎて下降する、国道41号（空港線）が清水口交差点を過ぎて下降する、環状線が古出来町交差点を過ぎて下降する、勾配に差はあってもいずれもその名残である。ナゴヤドームはちょうどその境界付近あり、出来町通の萱場バス停から北に向かうと、ナゴヤドームの付近でかなり急な坂を下ることに気づく方は多いだろう。これもその名残である。

大森地区の歴史的位置づけ

名古屋城は矢田川によって削られた熱田台地の北西端に位置し、名古屋城を越えるとその北側は一段下がっている状況を今でも見ることができる。名古屋城の北側は、築城当時は矢田川の氾濫原であり、足場の悪い湿地の状態であったという。この状況は名古屋城の

古地図などからもうかがうことができる。例えば、徳川美術館所蔵の「名古屋城絵図」（正保四年、1648年）（新修名古屋市史第3巻付図に所収されている）では、本丸および二の丸北側には堀に連なるような形で池を含む庭園が描かれており、この場所がもともと低湿地であったことを偲ばせる。名古屋在住の方がより身近にイメージできる図として、内藤昌氏によって復元された「名古屋城内郭絵図」が、名古屋市地下鉄市役所駅の地下改札口北端壁面にパネルとして紹介されているが、この図でも二の丸、御深井丸の北側に池を含む庭園が同様に描かれていて、一段下がっていることがわかる。

白根（2010）によれば、この地がもともと低湿地であった上に、名古屋城築城のための土取場となって池（蓮池）が出来たために、それを利用して御深井御庭（下御深井）と、さらにそれにつづく農地としても利用されたことが示されている。名古屋市蓬左文庫所蔵の「名古屋図」（元文三年、1738年）では、名古屋城本丸北側は上述の御庭や農地と思われるエリアが広がっているが、その北側は勝川筋（現、庄内川）まで、かなりの距離（直線距離で約3km）がありながら特記されたものは見当たらない。もちろん、この絵図では視点の中心が城下にあるので、この地域が縮小されて描かれたことは想像に難くないが、この場所は田畑を中心とした場所であったであろう。このような立地は、戦を想定した城の守りという点からは、戦略的には天然の要害となって北側からの攻撃を防ぐものであったようだ（例えば、新修名古屋市史編集委員会1999）。

したがって、江戸期に名古屋城から北東に向かうと、その先に矢田川の氾濫原が広がっており、さらに金城台を含む、瀬戸から小幡につながる丘陵地帯が位置していたわけであ

る。この状況は現在でもうかがい知ることができ、例えば名鉄瀬戸線に乗って栄町から瀬戸方面に向かうと、東大手駅の先で地下から地上に出て、やがて高架の車窓からは北側に広くひろがった平地（現在はほぼ住宅地）を望むことができる。一方、車窓右側にはかつて矢田川が熱田台地を削った段差を見ることができる（金城学院中学や名古屋市立工芸高校の付近）。そのまま進行して矢田駅の先で矢田川を越えて守山区内に進むと、小幡を過ぎるあたりから進行方向左手に丘陵地帯が見えてくる。これが小幡緑地、大森（金城台）、さらには森林公園、瀬戸へと続く台地である。名鉄瀬戸線はこの丘陵地の南側を台地に沿って進んでいくので、左手には常に丘陵地を望むことができ、瀬戸にまで至る。

江戸時代の瀬戸街道（当時は水野街道と呼ばれていた）は、大曾根付近から東に向かい、間もなく矢田川を越えるという今とだいたい同じルートをたどっていたと思われる。したがって、矢田川を越えるまでの間は上述の名鉄瀬戸線の車窓からの景色とはやや異なるが、その先は広く開けた矢田川の河川敷を進むことになったと想像される。つまり、今も江戸期もこのルートを名古屋から瀬戸方面に進むと、平坦地から初めて丘陵地が出現するのが、現在、金城学院大学が立地する小幡、大森地区ということになる。このような位置づけから、小林（1980）は「矢田川物語」の中で、当時常に緑に覆われた大地として「大森」の名がつけられたと推測している。

矢田川河畔は江戸時代には射撃訓練場として利用されており（安田修1986）、そのことから推測しても、少なくとも一部に田園は広がっていたであろうが、あまり人口密度は高くない地域であったと思われる。蓬左文庫所蔵の「尾張志付図春日井郡」（天保年間、1830—1844年）では、矢田川流域地域には小幡、大

森、印場などの集落をみることができるが、その周辺はおそらく農地など人口密度の高くない場所だったと思われる。ただし、「新修名古屋市史第3巻」（新修名古屋市史編集委員会1999）によれば、その中で大森の集落はかなり大規模なもので、小幡から印場まで家並が続く名古屋郊外の集落としては有数の規模であったという。いずれにしても、矢田川流域は名古屋城の北東側の天然の要害であり、軍事的にも名古屋の北東部の守りの要であったのであろう。

ところで、大森・小幡周辺から瀬戸にかけての丘陵地帯は、江戸時代には尾張藩の御狩場となっていた。後述の大森寺に祭られている乾の方が尾張徳川初代藩主の義直と出会ったのも、鷹狩に出かけた際であるとの有名な逸話がある。瀬戸街道はこの台地の南側に沿って続くが、現在の尾張旭市付近で二つに分かれて一方は台地を超えて庄内川側へと続いている。この街道は徳川義直の墓所である定光寺への参拝の経路になっていることから、定光寺道または御成道などと呼ばれている。つまり、この地域にはかなり頻りに藩主も訪れていたことが想像され、そうであれば藩主を警護するためにも、そして周辺地域の治安を維持するためにも、かなり厳格に管理をする必要があったと想像される。そのような背景もあって、瀬戸からこの付近にかけて、すなわち、現在の尾張東部に広がる丘陵地帯とその森林については、現在の瀬戸市方面に基盤をもつ水野家が代々御林奉行を務め、森林の管理や鷹狩のご案内役に当たってきたという（瀬戸市史編さん委員会1996、白根2006）。

さて、初代尾張藩主の徳川義直は現在の大森付近で後の乾の方と出会ったとされるが、その乾の方から生まれたのが尾張藩第2代藩主である徳川光友である。藩主の生母である乾の方は没後に江戸の小石川に弔われたが、

1661年にその出身地であった大森の地に大森寺が建立され墓所も移された。藩主の生母というような高い地位の方を祭る寺院は言うまでもなくかなり大規模な境内を保持していたはずである。事実、江戸時代（18世紀）に描かれた蓬左文庫所蔵の「大森寺山之図」（図1、原図は着色されている）を見ると、後述の新池（図2）や弁天池（図3）と思われる池の位置関係から推測して、少なくとも現在の金城学院大学東キャンパスのかんりの部分が寺領であったようだ。この当時の寺領を覆う森林の構成はたいへん興味のある点であるが、松ではないかと想像されるものの、かなりパターン化されていて、この図から樹種を推定することは難しい。

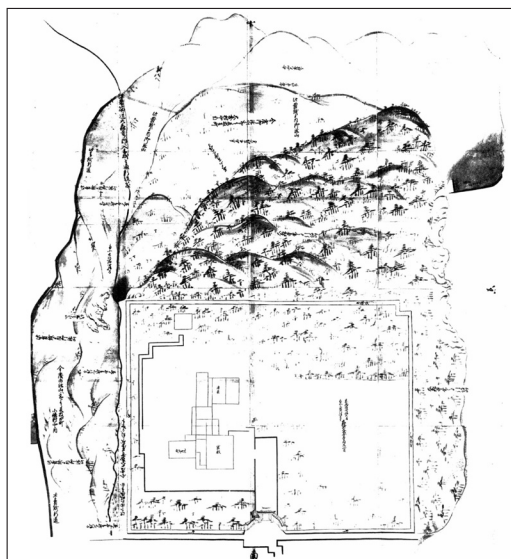


図1 大森寺山之図（名古屋市蓬左文庫所蔵）にみられる大森寺裏山

東海地方の森林の構成

東海地方の低山地域の場合、森林が放置されれば植物遷移の帰結として、シイ・カシ類を中心とした常緑広葉樹林に覆われるものと推測される（広木2002）。このことは同書内に示されている花粉分析データからも読み取れ、おそらく人の手によるかく乱が非常に限

定的であったであろう縄文時代までは、当地でもシイ・カシが優位な樹林が形成されていたことが推測される。実際に、現在の大森寺境内の森は、境内北側の墓地を含めてツブラジイを主構成種とする常緑広葉樹林に覆われている。また、金城学院大学のほとんど人手の入っていない林地では、コナラ・アベマキを中心とした落葉広葉樹が繁茂する一方で、林内には徐々にツブラジイ・アラカシ等の常緑広葉樹が優勢化する傾向がある。したがって、大森寺を含むこれらの山林が、仮に人々がほとんど入ることのない状態で長年置かれていたのであるなら、常緑広葉樹林に遷移すると思われる。

森林における地下水の涵養には、樹冠部での降雨遮断、樹木の幹を伝う樹幹流、樹木からの蒸散など、さまざまな要因が関わるといわれる（森林水文学編集委員会2007）。常緑広葉樹やコナラ・アベマキ等の大径木が優勢となる林地が長年この地を覆っていたのであるなら、降雨遮断や樹木による吸水や蒸散が激しく、また林床には水を保持するリター層も発達するにちがいない。ところが、尾張東部の丘陵地帯には、金城学院大学内の八竜湿地をはじめ、小幡緑地、東谷山などに湧水湿地が点在する。この湿地の特性については後に詳述するが、湧水がにじみ出るような湿地形成には、表土の流出のような環境のかく乱が背景にあると思われる。つまり、深い樹林に覆われるような状況のなかでは湧水湿地ができるとは考えにくい。したがって、もし、これらの地域において人間によるかく乱がほとんどない状況が長期間続いていたのであるなら、湧水湿地やそこに生息する固有の植物が今も分布しつづけることは困難であろう。現実には、現在の八竜湿地においても、植生遷移の進行、湿地の乾燥化はかなり激しく、ボランティアの方々の素晴らしい努力の結果、

かろうじて湿地環境の保全、湧水の供給が確保できているというのが実態である。もし仮に、この地域に人手があまり入らない状況（小林の「矢田川物語」では御林山すなわち藩有林であり、立入禁止との記述がある）があったとすると、おそらく植生遷移はかなり速やかに進行してしまい、後述する東海地方に固有の「東海丘陵要素植物群」等が分布する湿地が形成されにくい環境になってしまうのではないだろうか。

大森における水源確保 ー八竜神社と弁財天ー

江戸初期に建立された大森寺の寺領およびその周辺の林地では、住民等の利用はかなり制限されていたと推測され、少なくとも庶民が勝手に林内に入って樹木を切る等の作業がなされることは考えにくい。瀬戸から小幡・大森にかけての林地（小林の「矢田川物語」では、大森丘陵から森林公園をへて東谷山までの「水野山」と記載されている）は御林奉行の水野家が代々管理し、藩主のご案内役もつとめていた地域であることはすでに述べた通りである。なお、上述した「大森寺山之図」（図1）を見ると、周辺にいくつかのたため池と思われるものが示されている。同様の図は「新修名古屋市史第3巻」（新修名古屋市史編集委員会1999）にも見られ、矢田川からの用水とともにたため池灌漑の全体像をうかがい知ることができる。たため池のうちの一つについては、一つは現在の八竜湿地を水源としている新池（地蔵池とも呼ばれる）（図2）、もう一つは、現在ではほぼ埋め立てられてわずかに痕跡が残る弁天池（図3）ではないかと推測される。これらのたため池は、当然のことながら下流の水田に水を引くための水源として、一定の管理が行われていたと思われる。上の推測のように、その一つが新池であるとすれば、現在の新池が八竜湿地の湧水とその周辺

を流域とする雨水によって維持されていることからみて、少なくとも江戸初期にすでに八竜湿地が存在し、一定量の湧水が継続的に供給されていたと想像される。



図2 八竜湿地の新池（地蔵池）

八竜湿地の谷筋を現在の金城学院大学敷地東端に沿って上り詰めたところに八竜神社の祠がある。ここに至る谷筋には部分的に人工的植えられたと思われる杉が残っており、神社への参道があったのかもしれない。この神社の歴史については小林（1980）の記述からわずかながら知ることができる。現在の八竜湿地を含む一帯は「八竜」という地名になっており、その上り詰めた場所に上述の祠がある。八竜神社に祭られる竜神は雨を降らす神であり、雨乞いのための社である。竜は蛇を意味することがあり、水神としてあがめられたと思われる。この湿地が水源となり新池（池の中央に^{タテドイ}縦樋があり、今も水が抜けるようになっている）に貯められ、それが谷筋を流れて隅除川を経て矢田川につながっている。つまり、水源確保のための整備が当時地域の人々の手で行われていたことは明らかである。

一方、名鉄瀬戸線の大森・金城学院駅から大学へ向かう、八竜より一つ西側の、大学キャンパスの中央を南北に通る谷筋には、八剣神社の下に弁財天の祠がある。この谷筋はかつて弁天洞と呼ばれていた。弁財天は古代イン

ドでは水の神とされていたそうである。祠のすぐ上には現在はほぼ痕跡を残すのみとなった弁天池（図3）がある。弁天池入口には、現在その痕跡として「弁財天奥の院」の石柱と鳥居（図4）がある。なお、このすぐ上の現在金城学院本部棟のある場所がかつて湧水湿地であったと聞いている。

以上の事実から、大森寺を挟むこの2つの谷筋ともに水に関わる神が祀られ、かなり古くから湧水湿地に依存した貴重な水源であったと思われる。ということは、一定の管理がこれらの場所で行われていたことが想像できる。



図3 弁天池の跡



図4 弁財天奥の院の鳥居と石柱

江戸時代の林地の形態と利用

「治山21世紀への道」（愛知県尾張事務所林務課2000）には、愛知県東部丘陵地域のい

わゆる「はげ山」出現と復旧の歴史が多くの歴史文書の記録をたどってまとめられている。これらの記述から判断すると、歴史時代以降、人間の活動が活発化するにしたがって、いわゆる自然林は著しく減少してきた。特に人間の生活、農業活動等の活発化にともなって、アカマツの二次林の増加が顕著となった。

これを裏付ける資料として、白根（2006）は江戸時代の瀬戸から小幡・守山にかけての山林の状況と利用について、興味深い記録を提示している。この論文によると、当地の森林が基本的にはアカマツ林で、この状況は江戸時代を通じて維持されていた。記録によると、藩主を始めとして、当時の人々もマツタケに対する嗜好が極めて高く、今から見ても驚くほどの量のマツタケが生産採取され、江戸表はもとより家来衆に至るまで、大量に配布されていた。そのためにこそ林の良好な状態を維持するために、御林奉行を中心とした林地管理担当者は、例え藩の直轄管理の林においても一切人を入れない（原生林維持）というような管理ではなく、かなり強度の管理を行うことによって、松林の維持を行っていたことが想像される。つまり、御狩場というような林であっても、人を入れない管理ではなく、人を入れて植生遷移を止める管理をしていたのである。

このようなアカマツ林の増加、すなわち常緑広葉樹の伐採による落葉広葉樹の二次林形成、さらには表土の消失にもなうアカマツ林化助長の傾向は全国的にも広くみられ、各地での花粉分析などからも、おそらく人間の活動によって、古くは古墳時代以降徐々に、中世以降は急速に、松の花粉の増加がみられている（広木2002、森2012、新修名古屋市史編集委員会1997）。尾張東部丘陵地帯ではこれに窯業の発達にもなう陶土の採掘、燃料の薪の確保が拍車をかけた。

このような過剰な樹木伐採の状況に対して江戸期にはさまざまな規制がなされ、特に江戸前期までは、一時的ながら二次林としてある程度良好な状況が保たれてきたようである。しかし、その後の人口の増加や産業の発達は、このような規制にもかかわらず集落周辺の林地を著しく荒廃させるに至ったようである。「治山21世紀への道」(愛知県尾張事務所林務課2000)では過去の絵図等の分析から、1700年前後には林地の荒廃はかなり進行し、いわゆる「はげ山」が出現したと推測している。この事態に対処するため以前にもまして厳しい規制が試みられたようではあるが十分に機能することはなく、尾張藩初代藩主の墓所である定光寺御山でさえ森林荒廃が起きた記録があるとのことである。また、現在は落葉・常緑広葉樹に覆われる東谷山や小牧山も、「尾張名所図会」に紹介されている図からみると現在とはまったく異なる松を中心とした林相であったようだ。

では、金城台の環境はどうだったのであろうか。図1に示した「大森寺山之図」では樹

種の推定は難しかった。しかし、江戸末期から明治期かけて描かれた「尾張名所図会」に大森寺が紹介されており(図5)、これを見ると、寺の背景の山々は松ではないかと思われる樹木に覆われている状況が読み取れる。寺への参道は松が植えられていて、それが1959年に東海地方を襲った伊勢湾台風で倒れたとの記録があり(小林1980)、その樹木と裏山の樹木が同様に描かれていることからの推測である。なお、この図では、梅林という記述が図中にあり、また寺の境内には松とは違う樹形の樹木も描かれているので、樹木描写にある程度の写実性があることは確かである。推測の域は出ないが、背景の山々には松を中心とした林地が形成されていた可能性は高い。

アカマツの吸水力は広葉樹に比べて少ないと思われ、さらに、表土が露出したような疎林であれば、表土流出などのかく乱も生じやすかったと想像される。そのような植生であればこの地に湿地環境が生じ、さらには、東海地方の湿地形成原因(植田2002)である小



図5 尾張名所図会に描かれた大森寺(金城学院大学図書館所蔵)

規模な陥没などによって、湿地が随時更新される背景があると推測され、八竜湿地を含む点在する多くの湿地が維持されてきたことが納得できる。そして、これは上述の「大森寺山之図」に描かれた新池に、水を供給する湿地が上流に存在し続けたことを納得させるものである。

明治以降の小幡・大森の林地

明治期に入って以降は、皆伐ともいえる樹木の過剰伐採が一層すすんだ時代であり、第二次世界大戦までは今からは想像もできないような荒廃地化した状態が続いたと推測される。十分に機能しなかったとはいえ江戸期までの規制や管理のしびりが緩やかになったこと、一層の人口の増加と産業の発達によって、林地の荒廃はそれまで以上にすすみ、例えば、明治24年（1891年）に大日本帝国陸地測量部によって作成された地図（2万分の1）を見ると、瀬戸から小幡付近にかけても多数の崩壊箇所が地図上に示されている。とりわけ瀬戸地区の状況はすさまじい。これらの状況については「治山21世紀への道」（愛知県尾張事務所林務課2000）や蔵治（2010）に詳しいが、陶器の材料である陶土の採掘と陶器生産のための窯で用いられる燃料の確保のため、特にアカマツは根こそぎ利用されたのであろう。そのあまりのすさまじさに、愛知県は

1922年に瀬戸地域の森林復活を目指して東京帝国大学の演習林（現、東京大学生態水文学研究所）を誘致し、治山・砂防工事とともに植林活動を行うことによって植生復活を図った。

瀬戸地域ほどの激しさはなかったかもしれないが、名古屋市周辺の特に東部丘陵地にはいたるところで類似の状況があったようで、明治期から大正・昭和へと進む時期、人口の増加と産業活動の活発化はますますこの状況を進展させた。「治山21世紀への道」（愛知県尾張事務所林務課2000）の中には明治30年代から昭和初期にかけての多くの「はげ山」を記録した写真をみることができる。その後、第2次世界大戦期の空襲による樹林消失、住民の燃料利用としての樹木伐採はさらにこの状況を進めることになったのであろう（新修名古屋市史編集委員会1997）。東山地区（現在の名古屋大学付近）、八事地区、自由ヶ丘、平和公園など、筆者自身の記憶をたどると、昭和30年くらいまでのこれらの地域はまさにはげ山、腰あたりまでの樹高のネズミサシ、アカマツの灌木が生え、春先にはコバノミツバツツジが多く見られるような状況であったことを思い出す。名古屋の周辺地域史等の写真記事をみても、昭和初期から昭和30年くらいまでのものでは、一様に表土が削られアカマツの灌木がまばらに生える光景がみられ、



図6 1952年当時の金城台周辺の植生
現在の国道302号線と瀬戸線の踏切付近からの光景と思われる。中央やや右よりの丘に、現在ランドルフ講堂が建っている。

都市周辺地域の荒廃した状況はかなり広範囲にわたっていたものと推測される。本学キャンパスが金城台に設置されて間もないころ(1952年)の写真(図6)もまさにその状況を示しており、大森周辺も同様の状況であったことがよくわかる。

今後の検証

以上、江戸期以降の大森地区周辺の自然植生の移り変わりを過去の文献、写真記録、地図等を参考に検証してきたが、これらの資料から知ることのできる情報には限度がある。ここに述べたような状況を、もしかすると中世期まではさかのぼれる可能性があるとしても、では古代にはどうであったのか、あるいは有史以前はどうだったのであろうか。今もこの地域に分布する植物は、間違いなくこの地域で生き続けてきたものであるはずなので、それが育まれつづけた生息地が存在し続けたはずである。そのような視点からの分析は、近隣地域(例えば、松戸河遺跡、森2012)でも断片的ながら一部花粉分析による周辺植生の推定が行われているが、大森周辺の地域では、残念ながら試みられていない。大森周辺地域の植生の歴史を探るためには、今後花粉分析等の客観的な情報の確保がぜひとも必要である。

八竜湿地の保全と金城学院大学

金城学院は1889年に名古屋市東区白壁町に設立されたが、第2次世界大戦の後、新制の金城学院大学として新たに踏み出すにあたって、現在の守山区大森に新たなキャンパスの地を定めた。その際の大森地区の土地購入に関する経緯については「金城学院百年史」(学校法人金城学院1996)に詳しい。その概要をまとめると、1948年12月10日に金城学院が当時の東春日井郡守山町大森の山林(15町

7反1畝9歩)を150万円で大森区から購入した。明治期以降、大森寺の寺領は徐々に民有地となっていったと思われ、金城学院が購入するときにはすでに、大森寺から大森区に所有権が移管されていた。

さて、そのキャンパスの北東部に隣接して、上述した八竜湿地が存在する。八竜湿地は東海地方独特の湧水湿地であり、東海地方固有種、隔離分布種などで、このような湧水湿地に特異的に出現する「東海丘陵要素植物群」といわれる一群の植物が分布している。この湿地環境は、おそらく昭和30年代くらいまでは一部の専門家を除いて特に関心を引く対象でもなかったし、地元の方々にとっても、水源湿地としての意味しかもっていなかったものであろう。当時は上述のように、ほとんどの周辺地域は灌木にまばらに覆われたはげ山であり、水文学的にみて湿地が生み出されやすい状況であったと推測される。したがって、湿地は非常に湧水も多く、結果として、かく乱環境を好む湿地性植物にとっては良好な環境であったのであろう。

しかし、都市化の波が守山区にも押し寄せ、過去に、水田への水供給の命綱ともいえる重要な役割を果たしていたため池は、徐々にその機能を終えるに至ったのであろう。地域の自治会は利水のための水源池として水利権を保有していたが、農業利用の減少の結果、その価値を失っていったに違いない。おそらくそのような背景の中、1973年から1974年にかけて、当時の所有者(大森学区共有財産運用委員会が交渉当事者)は大森学区自治会の共有地であったこの土地を売り払うことを検討するに至った。湿地環境は住宅地としての利用などを考えると決してよい条件とは言えないので、名古屋市が守山環境事業所をここに建設する計画が生じた際には、渡りに船の話だったのではないだろうか。ところが、この

湿地に接してキャンパスをもつ金城学院大学家政学部（現在は生活環境学部）の故本田稔教授はたいへん熱心にこの場所の動植物相を調査し、他に例を見ない希少な動植物が分布することを見出していた（本田1977）。その結果、この土地の譲渡、開発計画を巡って、土地所有者、名古屋市、金城学院大学の間で湿地保護に関する問題が顕在化した（1973年11月12日中日新聞、1974年3月14日朝日新聞）。さらに、一部地元住民も開発反対の声を上げるに至って、湿地環境の保護を巡る論争が巻き起こった。当時の新聞記事によれば、金城学院が購入するという選択肢もあったようであるが、金銭的に困難であったため、最終的には金城学院大学が保有する土地とこの湿地の土地を交換することで合意が成立した。この経緯は「金城学院百年史」（学校法人金城学院1996）に詳しい。

記録によれば、まず、1976年2月に一旦八竜湿地を名古屋市が買い上げ、その上で、1976年8月31日に大学校地東端の一区画と湿地との土地交換を行った。さらに、当時の守山環境事業所建設計画にあたり、金城学院大学は名古屋市と合意し、あわせて土地の差額分300万円を受け取った。

1) 八竜湿地の保全活動

その後の保全活動と、八竜湿地の金城学院大学所有部分の名古屋市への貸借などについては、おおむね以下のような経過があった。

- 1986年2月 緑地保全地区指定
 - 1986年6月 水源部埋め立て
 - 1988年9月 大森自然観察会を開始
- この組織が、「八竜緑地公園愛護会」さらには「水源の森と八竜湿地を守る会」へと発展し、以後、活動を継続（代表：柴田美子氏）

1994年 ふれあいモデル地区事業指定（建設省）、柵などの整備

1994年 名古屋市と金城学院との間で土地使用貸借契約

以後、水源の森と八竜湿地を守る会、名古屋市、金城学院大学の3者の協力のもと、保全活動が継続的に行われている。これまでの保全活動の具体的な活動内容については、水源の森と八竜湿地を守る会作成によるパンフレット「八竜緑地 市民緑地」（水源の森と八竜湿地を守る会2010）に詳しいので、参照されたい。

その後、2012年に名古屋市が中心となって、今後の管理計画を関係者が一堂に会して検討（八竜緑地・市民緑地維持管理計画（樹林地）策定）した。この計画にもとづいて、当面の管理が実施されることとなる。

2) 八竜湿地の短期的・長期的保全

八竜湿地は名古屋市内に残る数少ない湧水湿地の一つである。東海丘陵要素植物群が分布する湿地としては、市内には、ここ以外に「島田湿地」「滝ノ水緑地」が知られているが、八竜湿地を含めていずれも住宅地に隣接する立地で、精力的な保全活動にもかかわらずそこに分布する動植物は絶滅の危機に瀕している。東海地方に見られるこれらの湧水湿地はいずれも小規模なもので、個々の湿地の歴史をたどる限り、寿命はそれほど長いものではないと思われる。にもかかわらず、そのような環境が長年にわたって存続し続けているのは、植田（2002）も示しているように、新たな湿地が周囲に形成されてきたことによると思われる。ところが、周囲が住宅地になるなど、都市環境内に小規模に孤立して残存する湿地においては、周辺に新たな湿地が形成されることはほとんど考えられない。そうであると、今、それぞれの湿地に分布している動

植物に関しては、今あるものを残すという方針しか採りえないのである。

そのような視点から考えると、保全の基本は「現状の保全」が原則であり、特別の事情がない限り動植物を「他地域へ持ち出さない」と「他地域から導入しない」ということとなる。外来種などの人為的な移入は言うまでもないが、現実には、動物の分布拡大（アライグマなど）や種子散布（セイタカアワダチソウなど）によって、非人為的にも常にこの原則が脅かされているのが現実である。

一方、これらの動植物分布の背景となる湿地環境そのものの維持については、最大の課題が東海丘陵要素植物群を育むために必要な「弱酸性・貧栄養湧水の適当な量の供給」である。八竜湿地の水質の保全に関しては、現在、継続的に調査が行われているが、その中でも1986年に行われた水源部の埋め立ての影響が示唆されており、東海地方固有の植物の生育に対する影響が危惧されるところである（吉田耕治氏、未発表）。他方、上述した森林を構成する樹種の問題についても緊急の対応が必要であると思われる。つまり、過去に湿地環境が維持され続けた背景には、我々の眼から見ればむしろ「荒れ果てた」と感じるような貧弱な樹林、例えば地表がむき出しになったアカマツの疎林の存在があった。しかし、現状ではコナラ・アベマキの大径木が林立し、さらには常緑広葉樹の進出も目立つ状況である。これらの樹林の発達、一方で都市近郊における緑の木立の発達として歓迎されるものの、他方では湿地というようなかく乱環境の涵養という面ではむしろマイナスの要因となるものである。これについては2012年の管理計画検討会でも話題となったが、今後、文学的な知見にもとづいて、計画的かつ大胆な伐採を検討する必要があるだろう。

ただし、環境保全活動は対象となる地域や

活動のタイミング等について、予測できない多様な要因や微妙なバランスが関与する可能性がある。その意味で、湿地環境の恒常的なモニタリングにもとづいて、常に活動の見直しや方法の転換を視野に入れるいわゆる「順応的管理」（例えば、鷲谷、1998）という発想を忘れてはならない。

謝辞

本稿をまとめるにあたっては、愛知県農林水産部佐竹政利氏から提供いただいた資料は極めて有用であった。執筆過程で本学薬学部助教吉田耕治氏との議論や氏からの助言は必須のものであった。名古屋市蓬左文庫および金城学院大学図書館からは所蔵絵図の掲載に関する許可をいただいた。実務助手の山本祐梨子氏には図の作成にあたって多大の協力をいただいた。以上、記して謝意を表する。

引用文献

- 愛知県尾張事務所林務課（2000）
治山21世紀への道 尾張地域における森林荒廃と復旧の歴史
愛知県 239pp
- 植田邦彦（2002）
里山の生態学（広木詔三編） 2-1 東海丘陵要素の起源と進化
名古屋大学出版会 42-57
- 小野知洋（2011）
金城型里山教育のこころみ —女子学生の環境保全活動参加へのきっかけづくり—
金城学院大学論集 自然科学編 8(2)：1-8
- 学校法人金城学院（1996）
金城学院百年史 1138pp
- 蔵治光一郎（2010）
日本における森林の役割の変遷と今後の森林との関わり合いのあり方
水環境学会誌 33：2-5
- 小林元（1980）
矢田川物語 —大森・印場・森孝新田の今昔—
愛知県郷土資料刊行会 264pp

- 白根孝胤（2006）
尾張藩御林の管理・利用形態と茸狩
徳川林政史研究所研究紀要 40：1-20
- 白根孝胤（2010）
近世後期における尾張家の植栽空間と大名庭園
徳川林政史研究所研究紀要 44：1-25
- 新修名古屋市史編集委員会（1997）
新修名古屋市史第8巻
名古屋市 414pp
- 新修名古屋市史編集委員会（1999）
新修名古屋市史第3巻
名古屋市 924pp
- 森林水文学編集委員会（2007）
森林水文学
森北出版株式会社 337pp
- 水源の森と八竜湿地を守る会（2010）
「八竜緑地 市民緑地」パンフレット
名古屋市
- 瀬戸市史編さん委員会編（1996）
近世の瀬戸 ―ここで作り、ここで暮した―
瀬戸市 289pp
- 広木詔三（2002）
里山の生態学（広木詔三編）1-1日本の森林帯と
原植生
名古屋大学出版会 10-15
- 本田稔（1977）
大森湿原の植生 ―金城台の自然（4）―
金城学院大学論集 家政学編17：9-24
- 松沢勲（1990）
東海の自然史（松沢勲監修・編）東海の地質6
濃尾平野の自然史地質
財団法人東海財団 68-82
- 森勇一（2012）
ムシの考古学
雄山閣 237pp
- 安田修（1986）
尾張藩矢田河原砲場に関する一考察（一）
鉄砲史研究178号 1-17
- 鷲谷いつみ（1998）
生態系管理における順応的管理
保全生態学研究 3：145-166
- 参考とした古地図等資料
名古屋城絵図（正保四年、1648年）
徳川美術館所蔵
名古屋図（元文三年、1738年）
蓬左文庫所蔵
尾張志付図春日井郡（天保年間、1830-1844年）
蓬左文庫所蔵
大森寺山之図（18世紀）
蓬左文庫所蔵
尾張名所図会（江戸末期から明治期）後編四
筆者が確認した版は、金城学院大学図書館所蔵の
明治13年発刊愛知県蔵版